

民族文化映像研究所

山に生きるまつり

1970年/38分/宮崎県西都市銀鏡

宮崎県の山村、銀鏡(しろみ)の銀鏡神社では、厳肅に霜月(旧暦11月)のまつりが行われる。そこで行われる33番の神楽は古風な山の文化を伝えており、1977年には国の重要無形民俗文化財に指定されている。銀鏡のある米良(めら)山地地帯は、焼畑・狩猟を生活の基本としてきた。近年は12月12日から16日にかけて行われている、この霜月まつりにも狩猟文化が色濃く反映している。まつりに先立って狩ったイノシシの首を神楽の場に安置し、その前で夜を徹して神楽を行うのである。12月14日の朝、神社境内に設けられた神楽の場(神屋・こうや)に「おしめ」が立てられる。おしめは神の依代である。その下には、荒御霊(あらみたま)であるイノシシ、和御霊(にぎみたま)である米、餅などが安置される。そして、各集落からお面様(神面・しんめん)を捧げた行列が集まる。お面様がそろわないと、まつりは始まらない。夜に入ると神楽が始まり、翌日午前10時頃まで行われる。舞うのは祝人(ほうり)。草分けの家を中心にした旧家の人々で、世襲である。村の男女が歌を掛け合う神楽囃子は、古代の歌垣を思わせる。

神楽は三つの大きい構成要素をもっている。一つは神々の降臨を願う神楽。面をつけないで舞われる。二つ目は真夜中から夜明けにかけて行われる、神々の降臨の神楽。神楽をつけた神楽である。三つ目は、夜明け以降に行われるもの。ずり面とよばれるリアルな面をつけ、ユーモラスな所作で生命の誕生や作物の豊穡をあらわす。なかでも30番目のシシトグリの神楽は、古風な狩人の装束をつけた二神が、シシ狩の所作をする。「とぎる」とは足跡を追うという意味である。このまつり最後の日、16日朝、銀鏡川の岩場を祭場としてシシまつりが行われる。イノシシの左耳の肉片7切れを串にさした七切れ肴を神に供え、その年に獲れた獣の霊を慰めるとともに、これから始まる狩りの豊饒を願うのである。



民族文化映像研究所製作2作品

18:00~『山に生きるまつり』/18:40~『竹富島の種子取祭』※途中入退場できません。

かいえんしゃ

海燕社の小さな映画会2018

後援：
沖縄県
那覇市

九州・沖縄から
文化力
POWER OF CULTURE

日時 2018年8月18日(土) 18:00~ (17:30開場) 場所 沖縄県立博物館・美術館 講堂(3F)
料金 1,000円(要予約) 予約/問合せ 098-850-8485 / mail@kaiensha.jp (カイエンシャ)

民族文化映像研究所

竹富島の種子取祭

1980年/55分/沖縄県八重山郡竹富町

沖縄県八重山諸島にある竹富島。旧暦9月あるいは10月の戊子(つちのえね)の日を中心にした10日間、タナドゥイ・種子取祭が行われる。まつりを前にした節の日。人々は軒にススキをさし、生活用具にシチカズラを巻く。この日は一年の始めの日とされ、司(つかさ・女の神人)がピーヌカン(火の神)やウタキ(御嶽)、水の神に祈る。4日間の準備期間を終えた5日目。戊子の日。農耕の神を祀るユームチウタキ(世持御嶽)に司が祈る。浄めや魔除けのための水汲み、ススキ取り、シューヌハナトリ(潮汲み)、まつりの御馳走、イーヤチ作り。戸主は畑でアワの種を蒔き、よく実るようにと祈る。この日は種子取、つまり種播きの日である。6日目、ンガソージ(精進の願い)。静かに身を慎む日。7日目、バルヒル(発芽)の願い。司と戸主たちがユームチウタキで作物の発芽を祈ったのち、ユークイ(世乞い)をする。歌い踊って作物の豊穡と家々の安泰を願って歩く。ユームチウタキの境内では「庭の芸能」、正面にしつらえた舞台では「舞台の芸能」が行われる。舞台の芸能の最初にはハザマホンジャーが「弥勒の世、麦の世、粟の世、米の世を

お願いしたのは、私でございます」と述べ、続いてミルク(弥勒)が子供たちに囲まれて登場し、感謝の舞いが奉納される。芸能が終わると、再びユークイ。8日目、ムイムイ(立毛)の願い。発芽した作物が立派に育つよう祈る。9日目、ミルクを守っている人への感謝の行事。10日目、長老が物忌みの盃を傾け、祭りは終わる。

【映画に収録している演目】

- 庭の芸能：太鼓/マミドーマ(よく働く女)/ジツチュ(十人)/マザカイ(真栄え)/クイチャブドイ(声を合わせ豊年を祝う踊り)/腕棒/ウマンシャー(馬乗り)
- 舞台の芸能：ハザマホンジャー(玻座間大長者)/カザヌキョングン(鍛冶屋狂言)/ユーヒキョングン(世曳き狂言)/アブジキョングン(老人狂言)/アマンチ(天人)/タケドンブシ(竹富節)/シングルロ(穀物の俵を数え転がす)

